特268-107
1200501125822
107

奥多摩水源池視察

寫眞帳

昭和十五年十月

始

特268
107

奥多摩水源池視察

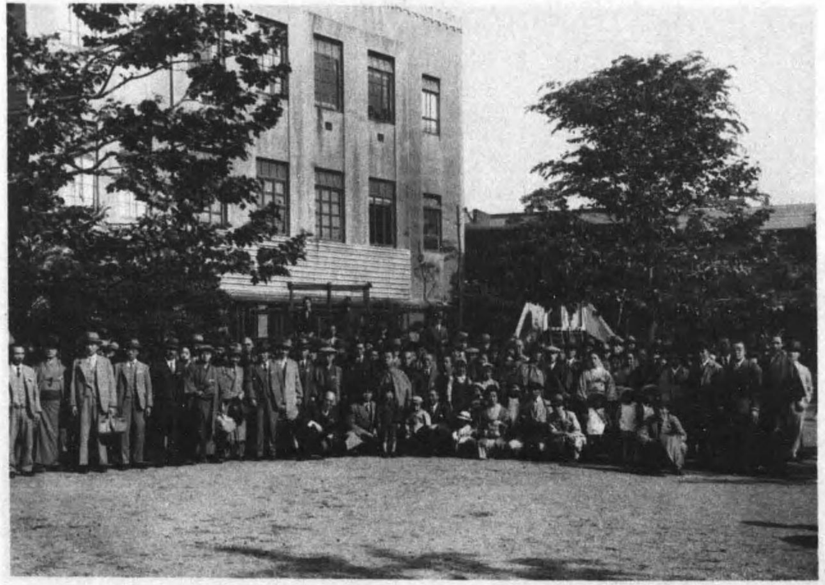
寫眞帳

昭和十年五月

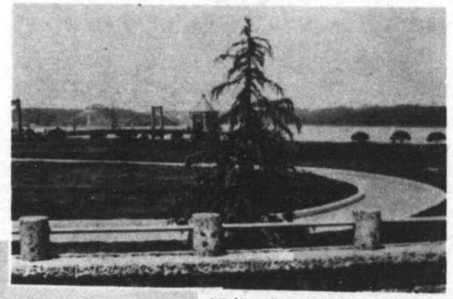
清風匝地

青山秀

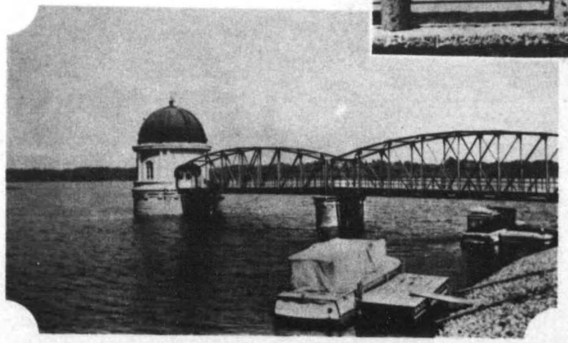
前大東京市長永田秀次郎閣下題字



朝まだき午前七時出發時に於ける神田公園

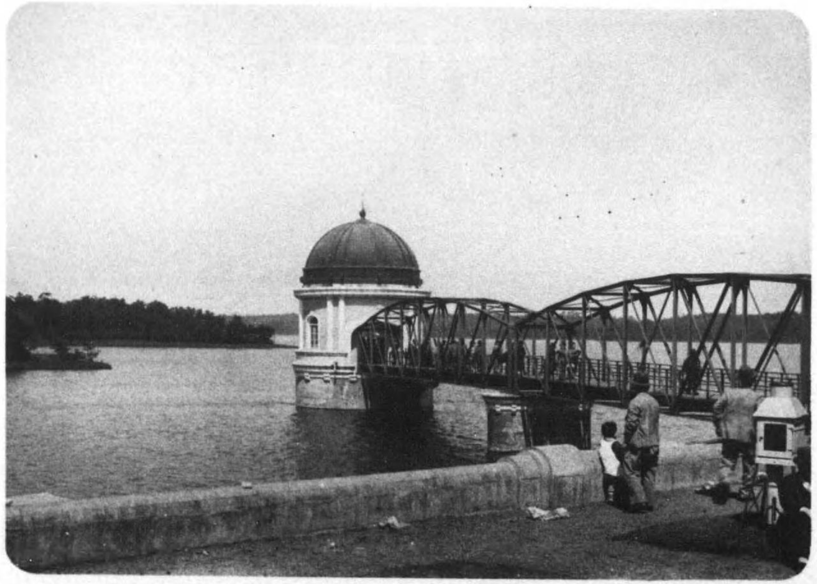


歐米を思ふ山口貯水池の庭園

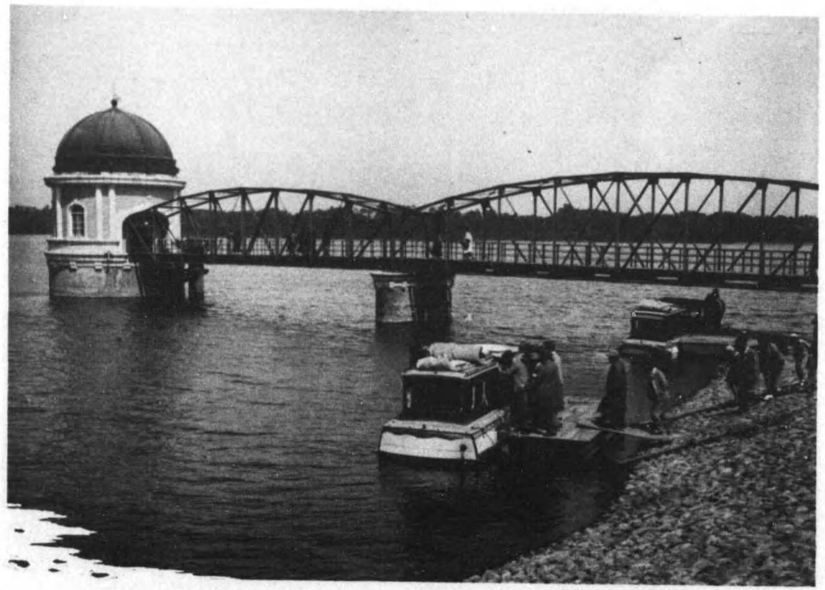


東都の誇り村山貯水池

村山貯水池庭前に於て福田所長の説明を聽き入る



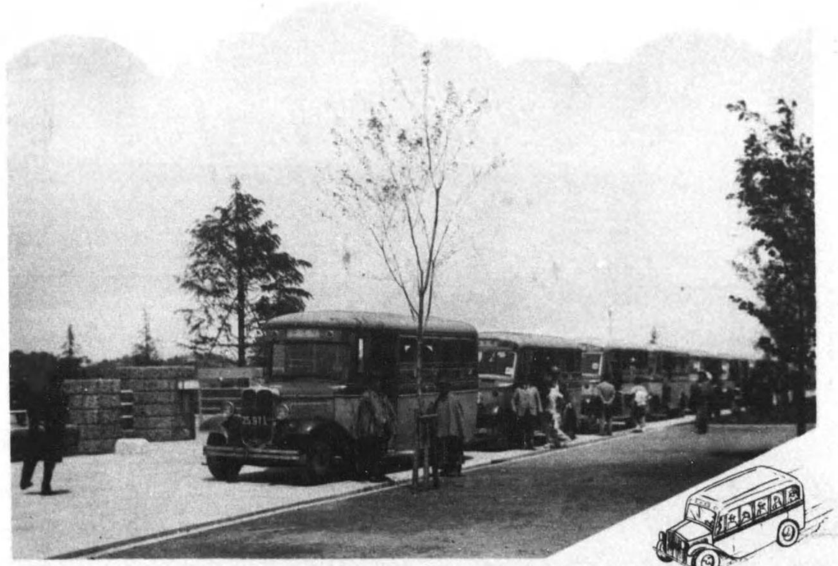
一碧積水を偲ぶ村山貯水池中の水筒視察



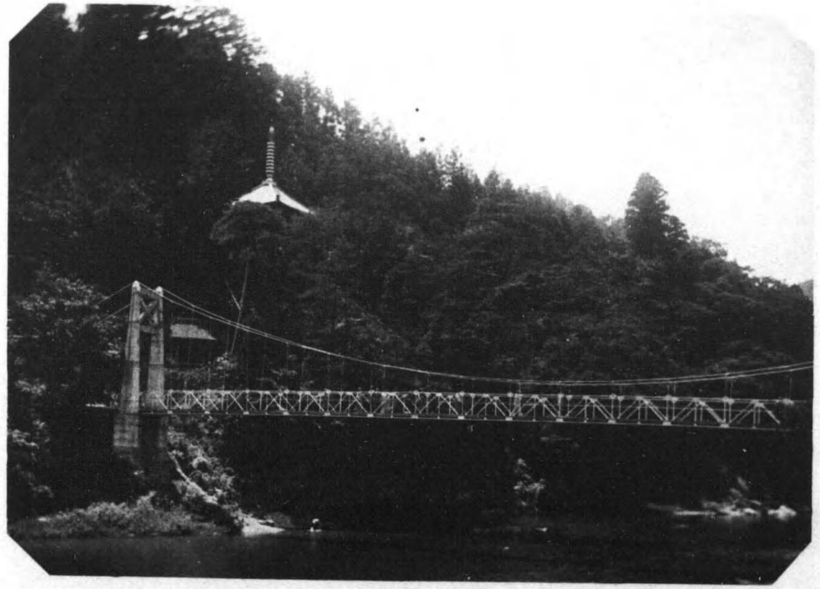
る渡に池上てにトーボーターモを中池山村ゝつひ徳を水積攀紺

山口貯水池詰所員の厚意に依る庭前の接待

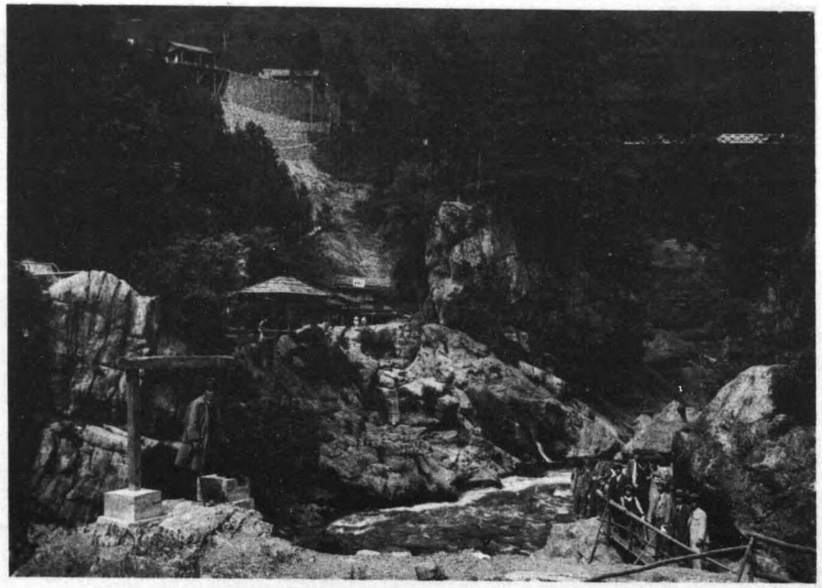
む望を緑深と碧紺りよ庭池水貯山村に山たし配を松小姫に生芝



山口貯水池畔に轍を並べて前進を待つ自動車



澤井鵜の瀬巌頭に旦暮鏡聲を漂す大日本寒山寺

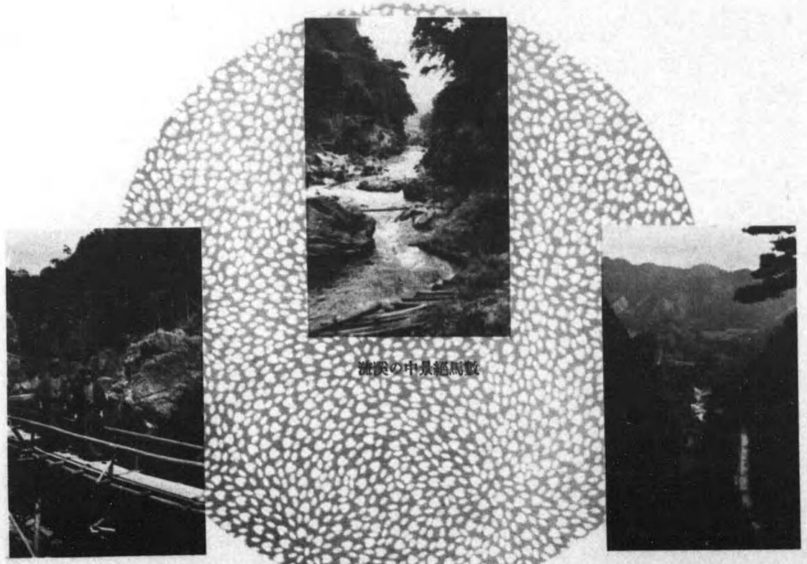


景絶の巣の鳩く鳴鹿河にれ群の石奇巌奇

巌奇の特異巣の鳩

りよ面正を橋鋼寺山塞

子父氏田塞の上巣巣の鳩



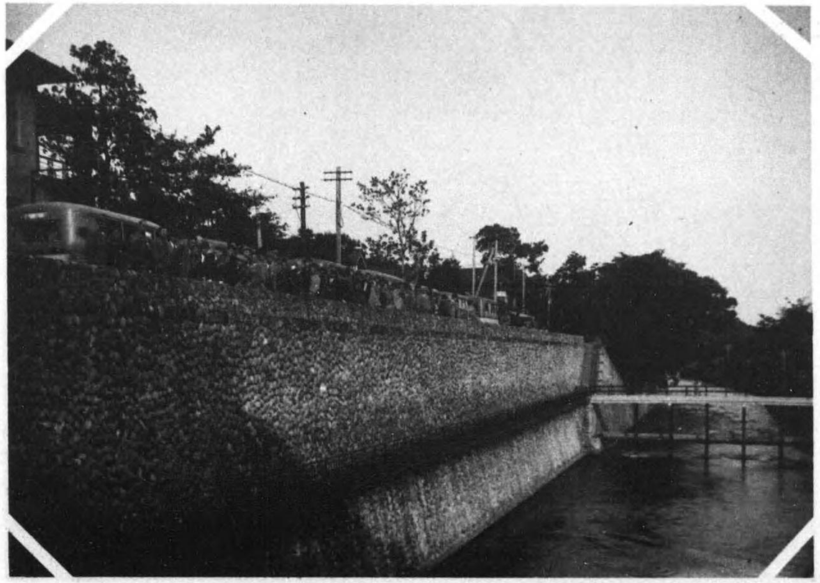
渡月橋の中景絶勝觀

橋る懸に巖奇の巢の鳩

道街川氷く續てふ沿に谷溪

眺望絶佳を誇る數馬石門上に於ける休憩所

御嶽橋畔に於て光陽を浴びる探勝團（歸途）



微淵の影靜かに春光を含み壁を抱く羽村取入口

水源地視察の趣旨

我が東京市は今や世界第二位に躍進し六百萬の人口を抱くと云ふ大都市であるが、吾等が何を置いても第一の頼みは先づ飲料水である事は何人と雖も肯づくだらう。其の水源地の視察をして水道に對する智識を得る事は如何に水道が貴いか。如何にして水道は吾々の口に入る道程を經るか又た何程の費用や何れ程の人手を要するかを知つて居れば夏期に於ける散水亂使を自ら戒める事が出來る。從つて夏季最大使用時に對しても些か心配無く供給を得る樣になるだらう現在の東京市水道の概要は別項の如く最大限五百萬人分に供給するの設備である然し既に我が大東京市民は六百萬人の大都會である故に水道の供給力と使用力に對しても充分な豫備智識を得て置く必要を痛感したので、玆に於て我々は特に視察を斷行いたしたのであります。幸に同日は天祐に依つて前日迄の降雨が夜半から晴れ上つた一方大方各位の絶大な御賛同を得て豫期以上の大好成績裡に終了する事が出來た事は衷心感謝に堪えません。

特に左記各位の熱誠なる御同情御後援に對して滿腔の謝意を表する次第であります。

御後援賛助御芳名（順不同）

東京市會議員　桑原信助氏
東京市社會局長　澤逸興氏
東京市水道局庶務課長　大野定男氏
東京市水道局給水課長　岩崎富久氏

東京市電氣局自動車課長　高島信一氏
同　運輸掛長　湊喜平氏
同　係　大岩安次郎氏
山口貯水池技手　儘田吉之助氏
村山貯水池技手　福田勇助氏
神田區公民學務員　市村駒之助氏
神田製本組合幹事　關根幸次郎氏
生稻安藏氏　櫻井謙吾氏
山崎平太郎氏　勝嶋繁盛氏
山本滿壽雄氏　大和田宇三郎氏
西村金三郎氏　神田昌亮氏
飲食物業聯合組合各員　殿村純二氏
河野仞一氏　高野由五郎氏
丸山源吉氏　谷部清二郎氏
島倉喜堂氏　以上

本誌作成に就いて

本社は今回飲食物業聯合組合役員有志各位主催の最も意義ある水道視察に對し賛助の意を表し寫眞部員を派遣し各位の團欒と奥多摩の絶景を撮影、玆に紀念寫眞帖を出版いたしました。何卒絶大なる御賛同を賜らん事を希ふ。

衞生新報社

奥多摩水源池探遊記

出發から歸着まで

K・S生

五月二十三日……晴少曇……

降り續いた雨が夜半から奥多摩探勝團の鹿島立ちを祝福するかのやうに晴れた。

朝まだき午前六時頃神田公園の集合場所にはモウ二十人近くの人が三々伍々に團つてゐた。間もなく今日の食糧が次ぎ〳〵と運ばれる、團長格の藤田氏が右往左往して肝煎りをしてゐた、一方各車輛の責任者も各自分擔してゐる受持ちに追れて多忙を極めてゐる、受附けが開始された頃は殆んど全部の人が參集してゐた艤て七臺の車輛に依つて色別けした徽章を辯當、水菓子其の他の食糧と共に一齊引換へに一ト混雜を極める、公園横に市の自動車が轍を連ねて並ぶ定刻藤田氏が司會者を代表して挨拶をした後、出發記念の撮影をする。

神田橋……雉子橋……竹橋……三番町……半藏門……新宿、七輛の轍を連ねてと云ひ度いが舊市内は止むなく各車輛離れ〳〵になる、流石中央本線の交叉點に加へて京王、小田急、等の接續點丈けに人車織るが如しの形容詞其の儘車中既に酒氣を帶びて中々眼かだ、新宿から青梅街道を行くこと十數丁で中野區との境に架る淀橋、現に淀橋區の名稱さへ殘した橋だが此の小橋に絡る面白い傳說を知つてゐる人は少い、S君が車中で盛んに述べ立てゝ居たのを其の儘失敬して披露する。

『以前は姿不見橋と云つてゐた應承の昔話だが、紀州の馬商人鈴木九郎と云ふ者が此の土地で馬を賣つた處が其の金の全部が古錢の大觀であつた、九郎は不思議に思つて此の金の一部を淺草の觀音樣へ寄進した處、御利益忽ち現れ次

第に富を積み、遂に人に盜まれる心配から金を下僕に背負せ小金ヶ原に匿す事にした。然し一方下僕が他へ此の事を洩すのを惧れて歸途、此の橋に待伏せして殺して仕舞つた。斯ふした事が度重つたので遂ひ所の人達ちは此の橋の事を姿不見又は『おもかげ橋』と呼んだ。然るに正保年間吉宗公遊獵の途次、此の傳說を聞き不祥なりと有つて其の名を淀橋と改めるに至つたのである』お蔭で退窟せずに村山貯水池へ着いたのが九時廿分、眼前に紺碧の色を湛えた我等の貯水池が展つてゐる。車を降りた人達ちは我勝ちに事務所の門內へ雪崩れ込む處々姫小松を配した芝生飾り氣のない庭園が一層清新な氣分を唆る樣だ。

休憩所に當てられた大きな一室には心盡しの湯茶が人待ち顏に調つてゐる。五六人の所員が接待に努めて居るが、平常雜踏の巷や室內のみに閉ぢ籠つて郊外の原野、木、水に渴して憧憬れてゐる人達ちだ殆んど、大半が庭前の芝生で思ひ〳〵の個所に位置を占めて微かな春風を滿喫しての朝食だ、暫らくして所長福田氏が、廣場で懇切を極めた當貯水池に就いての說明がある、其の概要を摘記すると。

東京市水道の水源は奧秩父の連峯笠取、大菩薩等を源として淸冽を誇る多摩川である、本市では多摩川の源一帶約一萬六千四百『ヘクタール』に涉る廣大な地域を水源地として水源林（植付本數約千百五十五萬本）の經營を致して居ります、尙多摩川の水を府下西多摩村大字羽通稱（羽村）で取入て玉川上水路に導いて取入口の下流五四〇米突の所から隧道によつて大半を貯水池他は舊玉川上水路に依つて其の沿岸一帶の灌漑用水に供給して居る、そして羽村線、村山線の馬蹄形混凝土隧道は、內徑三・三三米突で其の延長が八・六〇〇米突で最大の水量毎秒一六・七立方米突（六〇〇立方尺）であります、又貯水池は村山貯水池と山口貯水池があつて、村山は上下の二池に別れて羽村から隧道によつて導かれ兩貯水池に注がれた水は兩方共取水塔を通つて村山引出口の東南約一粁の所で合流して境淨水場に送られる、又村山上下貯水池の所在は東京府北多摩郡大和村、東村山村、村山村で此所の移轉戶數一二五戶で面積三七〇『ヘクタール』周長一六粁七、此の工事費が約千九十七萬圓で、一方山口貯水池は埼玉縣入間郡山口村、宮寺村、元狹山村及府下石畑村、村山村で、此の地の移轉戶數が四三六戶で、面積七一九『ヘクタール』周長一九粁二、工費約千百五十五萬圓である、又滿水面及貯水量は村山上貯水池の方が滿水面積四一『ヘクタール』有効水深一一・四米突、有効貯水量二・九八二・六二四立方米突で、同下貯水池滿水一〇二『ヘクタール』有効一七・四一一、有効貯水量一一・一八六・五一一立方米突で、又山口貯水池は滿水時一六六『ヘクタール』有効一九・〇米突、有効貯水量一七・七〇〇・〇〇〇、總計の有効貯水量は三二、八六九・一三五立方米突で、又村山、境線の暗渠の內徑は二・三米、延長一一・二五五米突、馬蹄形混凝土巻流水量毎秒七立方米突で、山口線の暗渠は內徑二・三〇——二・七三米共の延長五・〇九米突（村山線に合流點まで）である。

境淨水場は省線武藏境驛北方約一粁玉川上水路の北側に沿ふて在ります。面積は廿四『ヘクタール』あり貯水池から引出した原水の一半を此處で濾過し一旦和田堀淨水池に送水し市內に給水する。濾過二〇面、總面積九三・一二〇平方米、深サ二・七—三〇米、濾床の厚さ一・〇—一五米。一日の濾過水量廿四萬立方米（人口百廿五萬人分）である。』

終ると共に特別奉仕と云ふのでモーターボートで全部を數回に別けて山口貯水池の堰堤に渡つた池中長天一碧積水と相襯し風柔かにして些の搖ぎもない、兩岸處々取殘された山躑躅の紅色云ふ可くもない美しさだ。

廻送の自動車が並ぶと直ちに出發坦たる舗裝道路が曲折して續く誰かゞ『文明開化の山間だ』と呼ぶ眞に適評と合點く、間もなく山口貯水池だ、此處で再度儘田所長始め所員所員の心盡しの手厚い接待があつて、取入口共の他を見學した、深く厚意を謝し暫事にして辭し再び車中の人となる。

筆者は此の邊一帶の植林が如何にも調つてゐたのに感心した、山林は兎に角平地の然かも村落で斯くまで一致して植林に意を注いで居る所は恐らく稀れで

あらう。見渡す一路殆んど林中を疾走する感がある。

村々の家の白い壁には薄曇りの爲めに力ない朝陽の影が動いてゐる。續き渡る青山、青い畑が處々に電車軌道を挑んでゐるやうた、眼を閉ぢて車の音を聞えてゐると時々大聲でT氏が吐鳴るのでビックリする、青梅に近くなると漸く山らしいのが見え出す。左の方に高山と惣岳山が聳え、左前方に毅然として武州御嶽山……大嶽山が並ぶ、惜しい哉山には些か雲がかゝつてゐる『富士々々』中で誰か叫んだ左の窓から覗くと成程よく見える、何時もの靈峯共の儘にハッキリと愈々青梅の町だ。

宿場の感じが少しもない明るい街だ、戸毎に梅の古木や梧桐、槇、百日紅等一ト抱に餘る大樹を植えて街道の美觀を添へてゐる處流石に昔が偲ばれる、道路も田舍町に珍らしく廣い、町の中程と思はれる所に『裏宿七衛之遺蹟』と記した尺角程の細長い標柱が車中から右に覗かれた。之れは一時洛陽の紙價を高めたと評判された中里介山氏作小說『大菩薩峠』に藤の怪人物として活躍する七兵衛の遺蹟に相違ないだらうが、嘘か眞實か若し七兵衛が實在の人物であつたら『藤の俺を斯んな人目に觸れる處へ晒して』と冥途で嘸ぞ微苦笑してゐるだらう。

青梅の地名に就いて亦S氏が一席喋じた處に依ると『當所の青梅山金剛寺內に有名な老梅がある、古來から傳へて曰く、天慶の昔平將門が此の地を過ぎて東北への道すがら其の携へてゐた、生木の鞭を新らしく取り換へたので何心なく有の儘地中へ挿して行つた、處が不思議に鞭に根が生え發芽して其の後成長して年々實を結んだ丈けならまだしも、落葉樹の梅の木が落葉せずに四時常に青かつたので青梅の里と名付けだとの事だが、眞僞の程は保證出來ない。』

青梅を外れて暫らくすると多摩の溪流に沿ふて進むのだか、此處からはモウ奥多摩の感じが深くなる、霞みがかつた遠くの山々は文字通りに青毛氈を敷いた樣だ、川は割合に痩せてゐる白く光る礫の上を滑るやうにして流れてゐる清冽な水は山の麓を縫ふやうにしてゐる、時々深潭に釣を樂しんでゐる人を見受

けたが實際畫中の人を見るやうだ、釣狂の筆者亦些か羨望に堪えぬ、十一時五九分大日本寒山寺着、一同下車屢をサスつて吊橋を渡り詣でる處を一枚パチリと寫したが、遠景なので寫つたか何うだか方々でアマチア達ちがカメラを向けてゐる（寒山寺由來別項參照）

此處で自動車を區別して御嶽登山者と奥多摩探勝希望者とが分れたが、御嶽登山希望者は總員百八十幾名の內、僅かに筆者を加へて十八名に過ぎない、四號車を失敬して射山溪から御嶽橋を渡り悠々として山驚へ向つたが、四號車の剩員を他車へ押し込んだので些か不平組が出たらしい、山麓迄の道路は未だに完備されて居らぬので途中他の自動車に出逢ふと交はす餘地がないので內心穩かならず、進んだ天祐か自動車置場の泉茶屋まで一氣に進む事が出來たのでホット一息する。

登山ケーブルの割引券を手に入れる爲めに態々寄り度くもない茶屋へ這入るケーブル利用者を見越しての茶屋と同會社のタイアップの爲めだらうが餘りに露骨過ぎて好感が持てない、ケーブルの停留場まで約五丁此の間老幼者を除けば樂だ相僧筆者は數へ年四才の耳坊主を連れて居たので少々閉口した。

停留場名は瀧本驛山の中腹を平らにして軌道を直線に見上げる樣にして造つたのは好奇心を唆るに賢明の策かも知れぬ、掲示に曰く徒歩一時間半當利用者僅かに八分、往復六十錢とある。然し場の入口に擴聲器を取付けた蓄音機で櫻音頭をやつてゐたが山の尊嚴を傷められたやうで他の人は鬼に角筆者は興を殺がれる事夥しい、頭固かも知れんが山は山らしい氣分が欲しい、都會人が折角山へ來て里心を出すなんて感心した事ぢやない。

上下共卅分毎の發車で多數團體は此の限りに非ずと但し書きが見える、定員五十人位だが乘つて直ぐは車中角度に依る階段が五ヶ所もあるので一寸ホームに居るやうな氣持ちだが動き出すと臆病な筆者抔一寸動くのも怖ろしいやうな氣がする、恐々窓際に寄つて景色を見やうとしたが軌道を敷設する爲めに特に山腹を相當深く掘り下げてあるので側面の景色を全然見る事が出來ない、處々

工夫が三々伍々取り殘しの仕事を續けてゐる許りだ、歴偵なしの八分で富士見驛？に著く、舊道通稱中の茶屋から七八丁昇つた處かと思はれる二千坪以上も地均しをし山寄りに相當大きい二階造りの旅館兼休み茶屋がある、驛の眞前には寶店と腰掛け式の休み茶屋もあつた、平日の爲めか閑散らしい。

斷崖の近くに例の廣告ロハ台が多數に散在してゐたが、時間の都合もあるので直ぐ山上の社殿へ急ぐ事にした、道は未だ二三分通り出來上らず十人許りの人夫が元氣よく汗を流して働いてゐた、杉の植林がスク〳〵と伸びてゐる青葉若葉を吹く春風も心地がよい四五丁にして頂上の部落に着く、二十戸もあるだらうか道の兩側に高い家からは低い家を俯下ろしてゐるやうに標札を見ると共の大部分が神主らしい、二丁許り行くと石段の階段あつて上り切ると兩側に旅館兼休み茶屋の土産物が軒を並べて客を呼び込むのに一生懸命だ、右側の一軒に飛び込んで離家れに横になるとモウ動くのが嫌だ、先年參拜したので賽錢丈けを托して失敬する、運ばれたビールを一口して前方を眺めると遙か大丹波、小丹波の山々は幾分雨雲が低迷してゐるが視界が廣く共の雄大さに於て正に南畫的風致は申し分ない。

海拔三千八百尺の頂上にある御嶽神社は崇神天皇七年の御代に大貴己命、少彦名命を祀つたもので社殿は結構壯麗を極めてゐる、參道兩側に老杉多く氣候清涼盛夏なほ秋の如く夏期は殊に登山者が多く、又秋は沿道の紅葉或は秋草虫の聲など中々に捨て難い風情があるので風流人の杖を引くもの夥しいと、茶屋の內儀が盛んに提燈を持つてゐたがまん更らに出鱈目でない事を保證する。

同行者が參詣を終へてボツボツやつて來る何れも些かの疲れも見えないケーブルカーを利用しての壯年者なら登山は寧ろ飽氣ない位だらう、二三の人たちがビールを傾けて頻りに靑嶂重疊の絕景を讃め稱へてゐる、名物そばを註文して遲いのを催促してゐる人もある、傍らに年古りた古檜に注連繩を廻したのが目に付く何んでも當社建立當時からの神木で一名物であるさうな、一時間餘の休憩にスツカリ疲勞が癒えたので歸途に著く、富士見驛の斷崖にあるロハ台で緩り四邊の景色を嘆賞する心算でやつてきたが著くと直ぐケーブルが發車しやうとしてゐる、同行の人たちに謀ると『三十分も斯んな處でボンヤリするより』と一議に及ばず下山する事にした、乘車と共に發車だ人員を數へると一人不足してゐる。

昇る時は始めて〻夫れに前方をのみを見てゐたので、只だ磐道を通つてゐるやうで何んの變哲もなかつたが、降りに前方を見てゐると兩側の山々や射山溪を越えて大丹波、小丹波が手に取るやうによく見える、遲れた人へ瀧本驛の揭示場へ豫定を書殘すと共に出札係へ懇々依賴して、自動車置場の泉茶屋で待合す事にする、此間四才の丑坊主も樂に歩く茶屋の中爺さん要領よく手製の盆栽を相當値で賣け付けてゐる、街下に小屋を拵へて小熊を飼養してゐたが、共の不潔さには嘔吐を催ふし度くなる、書き殘した時間より五分を過ぎたが、未だに遲參者が見えぬ止むなく御嶽驛まで貸切りで追ふ樣依賴して出發する、歸途亦傍徨にも一台の自動車にも出逢さず御嶽驛へ着いた時は共の日一日の重荷を降ろした氣分を味つた、間もなく遲參者が『ハイヤー』で追付いて一同愁眉を開く三分後には鳩の巢行きの自動車も輜をきしらせてやつて來た、驛前で記念撮影をする事になつたが、土產物を買求めるに懸命の人たちは振り向きもしない僅かの人達ち丈けで撮影した。

四時を過ぎた光陽は弱々しく自動車の窓を打つてゐる、往時には氣付かなかつたが、靑梅附近の山々は靑梅石の產地として流布せらるゝ丈けあつて盛んに石材の切出しをしてゐた、羽村の堰堤まで一氣に疾走して一同下車、微瀾の影靜かに春光を含み壁を沈めて悠々迫らざる趣きが今迄てと打つて變つた水の變姿を展開してゐる、例に依つて記念の撮影をする時刻が迫つてゐるので各車輛の責任者が氣忙しく急き立てるやうにして漸く乘車立川を過ぎて迫暮近くに多摩墓地へ着く、今日の最後のコースたる世界の偉人東郷元帥へ敬意を表しての墓參、側面を迂回して表門へ廻つたが先づ共の廣大さに一驚する。

墓地の稍々中央と思はしき個所に滿々たる清水を湛えた大理石の大手洗塔が

ある。東郷家の墓所は其の塔の直前左側に約卅坪程の見るからに武人を連想する程の質素を極めてゐる、四五日前漸く全部竣成したとかで流石に總てが新らしい中央に元帥、右方に同テツ子夫人、二基の碑があつて、榊の植込みも見るからに清々しい感じだ、墓前に名刺受けが備へてあるので各自が名刺を投げ入れてゐた。

暮色が漸く迫つて來る幽かな程に茂つてゐる、木々の枝が定かに見別け難い程だ沿道に無數植えられた紅いツゞジが淋しさを唆る、そゞろ歩きに餘念のない人達ちを促して墓地を出た時は、既にヘツトライトの光りが長く地上を照らしてゐる、大分に遲くなつたので定速時一杯のスピートで雜踏の巷を飛ばして出發地神田公園へ歸着したのが午後正八時四邊はモウ暗に閉されてゐる、續々と續く自動車の轍の音に附近の人達ちが集つて來る、豫定歸着時より正一時間遲れた譯だ、全部自動車から降り切つて廣場へ集まる、藤田氏が今日の恙なき旅を終へての感激に慄ひ乍挨拶を爲し同氏の發聲に依つて萬才を三唱し、今日の樂しさを語らひつゝ嬉々として一同歸路に着いた。（喜）

大日本寒山寺の起源

寒山寺は南支那蘇州の地に在り寺は吳城の西、六七里の地點に存し、槽河に枕み、官道に沿ひ南北舟車の由る處、寺邊に楓橋あり、橋に上れば以て虎邱姑蘇城を望む寺堂は梁の武帝天監年間に創建され、元と妙利普明塔院と稱し、又楓橋寺とも言へり、寒山捨得嘗て此處に居れり寒山寺の名之れより起ると……。明治十七年頃臨池界の大家米航田に茂卿氏支那に遊びて當時の寒山寺主僧祖信なる者と交はり歸途に就くに方り祖信より釋迦佛像一基を贈られたれば歸來約四十年間一日の如く之れを奉安し而して日本寒山寺建立の志を起し氏の鄕土野州塩原の地を撰びしも一度奥多摩に杖を曳くに至りて皇都を距る僅かに二十餘里の地に斯くの如き佳境あるを知らざりき塩原長瀞の比にあらずと激賞し寺院を此の地に建つるに決し小澤太平翁に諮り翁の提示せる奥多摩澤井鶴の瀬巖頭を其の適地と定め工を起し、三ヶ年にして斯くて大日本寒山寺を此の地に建立したものである。

抑々寒山寺は寺にして寺にあらず、從つて何れの宗派にも屬せざる超宗派で思想善導、風教保持の念からの建立であるが、殊に智者は動の水を樂しみ仁者は靜の山を愛すの古言に倣し山幽にして靜溪水潺々として清洌、山水併せて風光明媚なる此處を選び、旦暮鐘聲を殷々と漂らし奥多摩の佳境更らに一名物を加へたるの感あり、春の花客に夏の綠蔭に秋の紅葉に冬の白雪に人の杖を絶えず、社會人心の上にも亦自ら益する所大ならん、大日本寒山寺の由來は斯く申す。（滿）

勝景鳩之巢の由來

明暦の三年正月十九日江戸に大火があつた際、時の老中松平伊豆守信綱の計劃で市區改正の事業と共に江戸城總曲輪の修築を行ふ事となつた、其の用材の提供方を當時の町奉行松波築後守正春から江戸で有名な材木商太田某に命ぜられた。同氏は命を奉ずるや諸所を尋ねて良質で且つ適材を本郡水川村日原の奥山と甲州丹波山村に發見したので、人夫を督して之れを伐採する事とはなつた然るに當時の事なので道路は僅かに人馬の通ずるに過ぎない程なので、其の運搬は殆んど不可能であつたので致し方なく、多摩川を利用して之を流木し諸所に飯場帳場を造つて人夫を督し約年餘を費して漸く目的を達した、今の鳩の巢の溪谷にある魚留淵上に蒐積した時は、實際材木の山を成したと古老が見た樣に語つてゐた。此の處に飯場小屋を造つて人夫と係官が居住する事となつたが其の時今も有る水神社の森に二羽の鳩が來て、いつか巢を營み朝夕餌を運ぶ樣が實に睦まじかつたので、諸人は之れを鑒鳩として愛護した、夫れで江戸からの使者と人夫達の往復の際にはいつも鳩の巢の處迄出て命令したり、又呼び

合ひを常とせしので、夫れが因となつて殆んど地名のやうに今日に至る迄で呼びなされて著名の地となつたのである。

吊橋を渡つて眺望絶景の第一の休憩所がある。

山道を降りて麓に行くに從ひ山鶯の鳴き聲を聞きつゝ、奇岩奇石の川原に出て、河鹿の鳴き聲を聞きお手々をつないで、皆なが怖いよ／／……と連發し乍ら丸太橋を渡つて下を見ると我等の水道水源、清泉が玉と散つて飛散るあたりひや／／する。河原に立てば一行中の茶目大將勝島君は僕は、野球の選手である……。と計り石をひろつて投げる／／る、石が唸りを生じて飛び岩に當つて碎け散る、佐藤平次郎君の茶目又眞似る嬉しい、こんな遊びをして居つては一日でも二日でも名殘りがつきぬ……。心殘して山を數馬公園に向ふ。先頭には勝島君が道の案内役を承る、然るに如何したのか山には道がなく其の道の無い山を藤蔓に梶まり又は竹や木の根岩角によじ登る事十町餘り、子供は泣き出す私は足が上らんと云ふ者蚊口氏（三松）が酒の氣もどこへやら子供を負ふて山登り。よせ幸命閻たぞは此の樣な道は私し生れて始めてだと云ふ（五〇）其處で勝島君よしと計り勞り手を引く山登り孝行息子が『親孝行の標本で御座い』と誰かが云ふ。二十町程も行くと漸く道に出る、樂は苦の種苦は、樂の種、實に見事／／絶景／／向の山の大岩奇石先づ奥多摩第一である、此の所へ來てこそ奥多摩を語るのである。（滿）

數馬附近の勝景

空に杜宇の聲がするそれを眺めこれを聞きつゝ、多摩の溪谿に沿ふて担々砥の如く舗裝された道路を眞向から亘手を擴げて拒むが如き數丈の亘巖、之れを其の儘にして穿つたのが奥多摩奇勝の一名物數馬の石門である。亘巖の突端に立てば御獄連山を透かにして仰ぎ、脚下に大東京六百萬市民の生命を司る溝淵極りなき多摩の碧流が岩を咬み崖に碎きつゝ早瀨に渦を卷き流れに淀み嶮奇棘

棘の感に打たれる。

天正の其の昔一代の偉傑武田信玄が戰爭に行く途次黑岩に泡を噴く水の姿に魅せられて急ぎの一日を捧に振つて、トウ／／露營を餘儀無くされた程の勝地だと土地の人々は今以て自慢にしてゐる。

怪姿の奇巖を攀ぢて青年團の手になる橋や、辷り臺の樣な階段の無い胸突く坂橋を登れば一層眺望絶佳であるが、然し杖曳く人の足は思はず釘付にされるであらう、眼下數十丈の溪流には滔々として激流が岩を咬むでゐる。

此處に小さな祠がある數馬神社である、社前には猫額程の平地を利用して茶屋、展望臺、小供の遊び場を設けて、休息場にして居る。

社の後に毅然として聳え立つ亘岩四邊を睥睨する處、即ち天狗岩で此の岩上に登攀することも出來る此の邊一體を現代的に數馬の奇勝と呼んで居る。（昌）

◇——◇
◇——◇
◇——◇

366
351

昭和十年六月十五日印刷
昭和十年六月十八日發行

定價金壹圓

東京市神田區多町一丁目十番地
編輯兼發行者　藤田孫八

東京市神田區司町一丁目一ノ一
印刷者　株式會社文明社

東京市神田區多町一丁目八番地
製本者　關根幸次郎

東京市神田區鍛師町七番地
題字印刷者　市村駒之助

東京市神田區佐久間町三丁目十六番地
コロタイプ　河野仙一

東京市神田區多町一丁目十番地
發行所　衛生新報社

終